

「明治百五十年をどう見るか」

2018年02月27日

「東京新聞」は「明治百五十年『薩長史観』を超えて」と題して、日本近現代史に詳しい作家の半藤一利氏とノンフィクション作家の保坂正康氏の対談を、4回にわたって掲載した。明治百五十年を迎え、明治維新を顕彰する動きがある。明治期に関するものが盛んに取り沙汰されているようだ。維新を主導した薩摩（現鹿児島県）と長州（現山口県）側からの視点で「明るい時代」と明治期を称える「薩長史観」が根強い。二人の論者はファクト（事実）に基づいた明治から始まる近現代史を捉え直そうと対談している。

江戸幕府を倒して、薩長による明治政府ができたが、明確な国家像の設計図を持っていなかった。国民統合のために天皇を持ち出し、国家の基軸に天皇を置いて、立憲君主国家を作った。西欧に倣えと文明開化を進め、富国強兵に乗り出した。日清戦争に勝利し、国家予算の1.5倍の賠償を取り、軍人は戦争に勝って賠償を取ることで味を占めた。日露戦争にも勝って、国威は発揚された。この時、陸海軍は正確な戦史を記録したが、公表したのはいかに日本人が力強く戦い、世界の強国である帝政ロシアを倒したかという「物語」「神話」としての戦史であった。司馬遼太郎の『坂の上の雲』はベストセラーになったが、「物語」「神話」の戦史を資料にして描いている。日本海戦でバルチック艦隊を迎え撃った東郷平八郎は英雄とされているが、事実は薄氷の勝利であった。二百三高地を指揮した乃木希典は白兵戦と突撃戦法で陥落させたが、無謀な作戦を隠し、美化した記録だけが残った。国民は徴兵制と重税で、これ以上戦えないという厳しい状況下、米国のルーズベルト大統領の仲介で何とか講和に結び付けることができた。しかし「大勝利」に酔い、軍人や官僚たちは論功行賞で、勲章や爵位をもらった。国民には真実を伝えず、天皇制が肥大化し、リアリズムに欠ける国家にしてしまった。

「日清・日露戦争」までは良かったと美化する論評をしばしば聞くが、国民に大きな犠牲があったことを知らせず、一等国になったという風評が先行し、一部の人間だけが利益と栄誉を手中にしたのである。安倍晋三首相は「日本を取り戻す」と公言している。どの時代の日本を取り戻すかは判然としないが、明治憲法下の「日清・日露戦争」に勝利した時代を考えているのではないかと、私は想像している。

保坂氏は下記のように語っている。東条英機や陸海軍の軍事指導者たちは戦争をなぜしたかったのかを、天皇の側近だった木戸幸一に質問したところ、「彼らは華族になりたかった」という答えだったという。何万、何十万の戦死者を出そうとも、天皇の名で行うので、自分たちは逃げられる。明治のうその戦史から始まった軍事システムは、昭和時代に拡大解釈され、肥大化した、と。半藤氏は下記のように語っている。海軍中央にいたのは全部親独派で、親米派は追い出されていた。親独派はほとんど薩長出身者であった。陸軍も親独派はだいたい薩長であった。戦争終結に尽力した鈴木貫太郎、米内光政、井上成美などは、薩長に賊軍とされた旧藩、幕府方の出身者であった。太平洋戦争は維新時の官軍が始め、賊軍が止めた。これが、明治百五十年の裏側にある一つの事実である、と。だから、保坂氏は警告している。明治百年の首相は佐藤栄作、百五十年は安倍晋三で、二人とも山口県（長州）出身者である。百五十年経っても、薩長が影響力を持っていると受け取られる。隠された資料や視点を拾い上げ、もう一度史実の検証をすべきである、と。

二人の対談は、歴史は権力者が都合よく創作し、国民に誤ったものを流布する、ファクトに基づいた情報を得ない限り、国民は騙され続けるという論旨であった。現在の日本は、知りたい情報はないと隠蔽し、提示した資料はでたらめという状況ではないか。